

実践女子大学下田歌子記念女性総合研究所
『年報』第五号 二〇一九年三月 抜刷

下田猛雄について

——附：下田猛雄位牌調査報告——

愛甲 晴美

下田猛雄について

— 附…下田猛雄位牌調査報告 —

愛甲 晴美

はじめに

数年前より継続調査を進めている、本学図書館所蔵下田歌子関係資料（以下下田資料）の下田歌子自筆日記明治二十三年五月二十二日の項に、「天倫院七回忌の法會執行す」の一文が記されていた。

天倫院は下田歌子（以下歌子）の夫下田猛雄（以下猛雄）の戒名の一部である。以前より猛雄については、不明な点が多く、この戒名についても、「下田家過去帳」（三六六八）の記載が不明瞭であった（図1）。正確な戒名を明らかにするためにも位牌の確認は不可欠だが、これまで位牌は所在不明とされていた。そこで、現在猛雄、歌子、平尾家の墓所を管理されている岐阜県恵那市岩村町の隆崇院に位牌調査をお願いした。

位牌発見のご連絡をいただき伺うと、発見された位牌は同寺に

安置されている歌子の位牌と比べると、予想外に小ぶりで形状も異なっていた。ご住職もなかなか気付かれないような場所に紛れていたとのことであった。

この位牌は小さいながらも端正で、これまでの猛雄に関する記述から受ける印象とは異なるものを感じた。そこで今回、猛雄についての関連資料から、その人物の一端及び歌子との関係を再度検証することを試みた。

猛雄とはどのような人物であったのだろうか。四年あまりの短い結婚生活は病死による離別で幕を閉じ、その後の歌子の目覚ましい活躍が語られる一方で、猛雄との結婚は不幸な出来事として捉えられ、歌子は病身の夫を献身的に看病しながらも、女子教育への一步を私立学校の桃天学校という形で踏み出したが、それは忍従の日々であったと伝わっている。

本稿では、猛雄の出自、平尾家との接点、結婚に至るまでの歌

子との関係、結婚と死別までを、順を追って検証していくこととする。末尾に今回の位牌調査報告も附記する。

なお、検証にあたつては先行研究である山口典子氏の論文から多くの引用をさせていただいた。また、本文中の年齢は原則として満年齢を用い、資料中数え年の場合は原文のままとし、本文中に用いる場合は(数え)を付した。

1. 猛雄の家系及び動向

猛雄はどのような出自の人物であつたか。その手掛かりとなる主だった資料として、下田資料の「下田家過去帳」、猛雄自筆の「手扣」(六四七)及び寄留替等の申請書類が挙げられる。

猛雄は「手扣」に自身の履歴を記している。同資料中履歴に関する記述はいくつか見られるが、その一つである明治九年の記述の一部は次のように記されている。ただし、判読できなかった文字には□を付した。

舊香川縣

養祖父下田賢藏亡^元京極長門守銀奉行

相勤

実祖父山本兵衛亡同大目附相勤

実父 下田耘八亡同小納戸相勤

禄^{墨清}石^布 生國 第三大區一小區
武藏 土族 下田猛雄

嘉永元戊申年六月十八日生

萬延元庚申年二月十七日^{ニテ}幼年

家督武術為修行^元大垣藩

島村勇雄方^江入塾被申^付明治

一戊辰年二月五日丸龜藩^江歸藩^ス

士官

同廿八日^{墨清}兵隊^{ニテ}被申付同年十一月

九日士官^{ニテ}西京^江出兵^ス明治

二巳巳年三月二日丸龜^江歸藩^シ

同年八月十二日擊劔修行被申

付大坂府桃井春藏方^江入塾

明治三庚午年五月廿三日出足

勢刃尾刃濃刃^ヲ巡^ス明治四

辛未年二月十八日丸龜^江歸藩

同年六月八日^{ヨリ}文学修行^{トシ}

^テ東京府寄留明治九年三□

四日東京府士族被仰付候也

京極長門守は讃岐丸龜藩六代藩主(丸龜藩京極家八代)高朗^{たかあきら}のことである。高朗の治世は文化八年から嘉永三年である。猛雄が歸藩し、士官したのは次代の朗徹^{あきゆき}の時であるが、猛雄は生國武藏

とあるのでおそらく江戸生まれで、十一歳の時に家督を相続している。前掲の履歴では禄を墨消しているが、別の記載から四石であったことがわかる。養祖父下田賢蔵は「下田家過去帳」によれば、実名は治穩といい、嘉永三年一月十三日に五十六歳(数えで没している(図2))。猛雄がまだ二歳に満たない頃に亡くなったことになる。父松八は過去帳に記載が見られず生没年が不明であることから、家督相続し、剣術修行に出る万延元年まで、どのような家庭環境で育ったのかは明らかでない。

下田家過去帳の記載事項から、可能な範囲で縁者を整理したものが次の表である。

凡例

- 一 過去帳記載の人物名には、大半に「俗名」と付されている。俗名あるいは俗名と思われる名以外に、別記された名は実名と判断した。(一)内は実名、「」内は記載のある続柄を示す。
- 一 判読できなかった文字には□を付し、人名は表記に従った。
- 一 没年齢は過去帳に記入のあるもののみとした。
- 一 没年は西暦を加え、月日は西暦表示との差異が生じるため、年のみとした。

- *1 過去帳には、一覧表の人物のほかに東條信耕の記載がある。
- *2 前出の善右衛門とは別人と考えられる。
- *3 「明治十三年下田猛雄二嫁ス」とある。
- *4 前出の八十八とは別人と考えられる。

*1 過去帳記載人物名	没年	没年齢(数え)
下田源七(富因) 龙世「源七妻」 手宇「源七後妻」 意□(富治)「源七長男」 佐津「源七二女」 智以「源七三女」	安永一年(二七七二) 宝暦九年(二七五九) 安永九年(二七八〇) 安永六年(二七七七) 安永七年(二七七八) 安永六年(二七七七)	
下田善右衛門(因治) 津世「善右衛門妻」	延享二年(二七四五) 明和三年(二七六六)	
下田八十八(治孝) 理津「八十八妻」 筆「八十八後妻」 八十治「八十八悴」	文化七年(二八一〇) 天明六年(二七八六) 天保九年(二八三八) 寛政一年(二七八九)	六十四 二十九 八十二 一
下田賢蔵(治隠) き尾「賢蔵妻」	嘉永三年(二八五〇) 安政五年(二八五八)	五十六 五十
*2 下田善右衛門	明治四年(二八七二)	五十二
下田耕之進「下田耕治郎嫡子」	弘化五年(二八四八)	三
下田猛雄 歌子「*3」	明治十七年(二八八四) 昭和十一年(一九三六)	三十七 八十三
安「*4 下田八十八三女」	嘉永五年(二八五二)	二

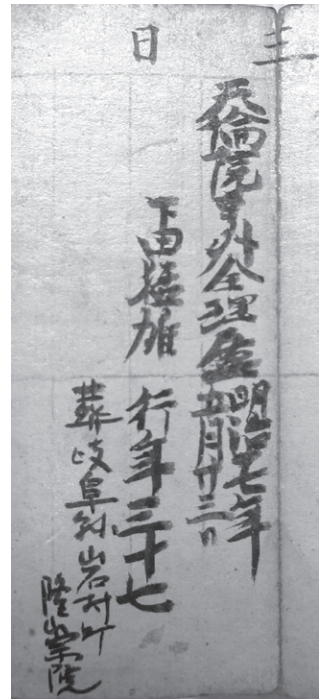


図1 「下田家過去帳」(部分)

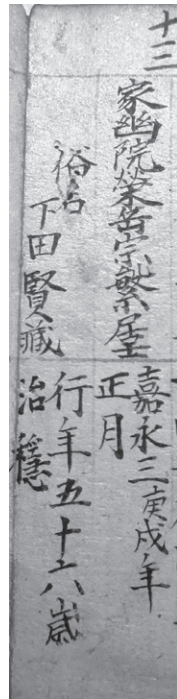


図2 同右

下田賢藏の名は、嘉永三年から五年の間に作成と推定される「丸亀藩分限帳」に「御次書役 銀拾貳枚 御到来方加役 下田賢藏 三人」とある。また、「丸亀藩俸禄帳」(天保十三年)³、「天保十五年 給禄帳」に「銀拾三枚 下田賢藏三人」とあるが(図3)、「手扣」にある役職については不明である。

また、過去帳には下田八十八という名が記されている。実名を治孝といい、文化七年に六十四歳(数え)で没しているので、延享四年生まれということになる。

過去帳にはそのほかに、嘉永五年没の安という人物の記載があり、「八十八の三女」とある。「行年二才」とあるので、安は嘉永

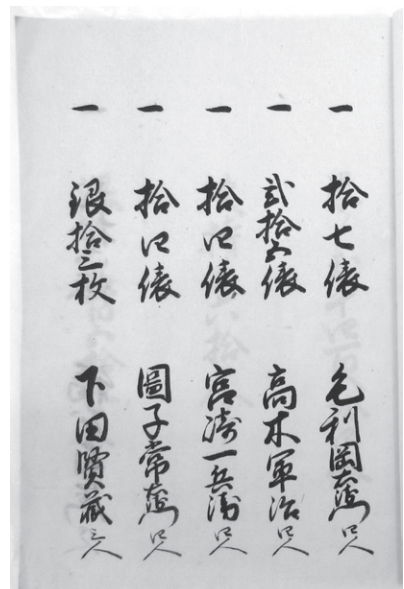


図3 「天保十五年給禄帳」部分
(丸亀市立資料館所蔵)

四年生まれと考えられ、この人物の父親である八十八と過去帳前出の八十八とは年代的に合わない。下田家には同名別人の八十八がいたと推測される。

下田八十八の名は文政十年の知行録に見られる。京極高朗治世の切米合力で「銀拾壹枚 下田八十八 三人」と記載がある。⁵

さらに、「諸藝上覧一件帳」の文政十三年の上覧の記録には、太平真鏡流剣術、正統関口流柔術の項にその名が見られる(図4・5)。安の父親の八十八が、知行録や上覧の記録にある八十八と同一人物なのかは不明である。

過去帳からは、ほかに下田善右衛門が二人いたことがわかるが、「丸亀藩分限帳」享保十二年(安政六年写)に善右衛門の名があり、年代から延享二年に没した人物の方であろうと推測される(図6)。

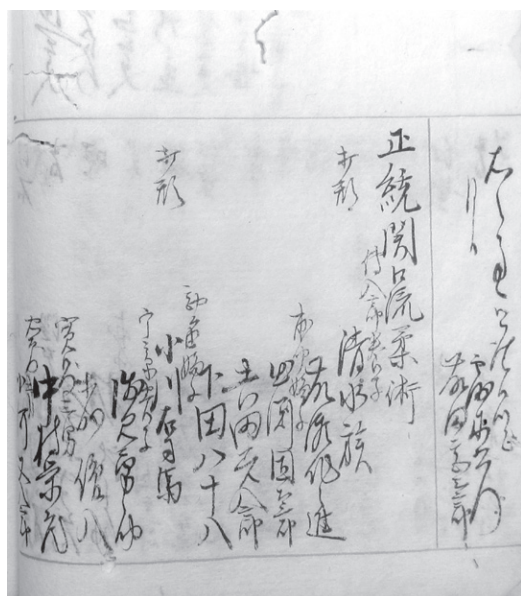


図5 同右

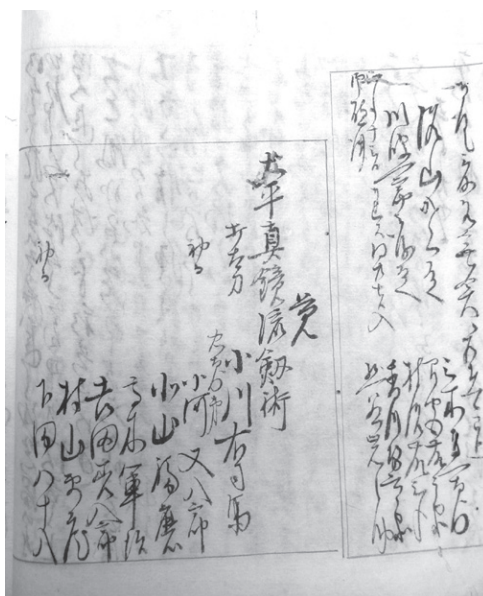


図4 「諸藝上覧一件帳」部分(丸亀市立中央図書館所蔵)

これらの資料からは、下田家がかなり下級の身分であったことがわかる。その中でも一族の中の八十八が剣術や柔術に励んでいたことは、猛雄が剣術の道へ進んだことに何らかの関係がある可能性も考えられる。

下田家に関しては以上の事柄が確認できるが、実祖父山本兵衛については明らかでない。

一方、録蔵の「寄留替願」(一四四三)には、猛雄について、「舊丸亀藩亡下田耕雲倅」と記載されている。耘八ハ耕雲ということであろうか。

猛雄の幼名が貫一であることは山口がすでに述べているが、猛雄の剣術の対戦記録である「剣道試合人名帳」(六四五)の中ほどに桃井春蔵の門人であることを示す記載があり、猛雄の改名前

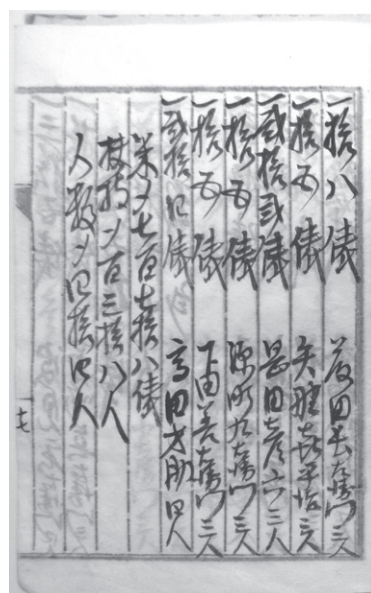


図6 「丸亀藩分限帳」
享保十二丁末年(安政六年写)
部分
(丸亀市立中央図書館所蔵)

の名として貫一と記されている(図7)。年月日は書かれていないが、桃井春藏への入門は猛雄の履歴によれば明治二年八月である。しかし、この試合帳の最初の頁には田宮流の島村勇雄門人として下田猛雄の名が記され、白文印は「治理之印」とある(図8)。猛雄の剣術関係資料にも治理の記載が見える(図9)。下田家過去帳の善右衛門、八十八、賢藏などの実名から見て、猛雄の実名は治理であろう。戒名にある「全理居士」の「理」は「治理」に由来するものであろうか。松原正勝氏は、猛雄の「雄」は師の島村勇雄から一字貰って改名したとしている。

履歴によれば、家督相続後に大垣藩田宮流の島村勇雄に入門し、その門弟となった。明治元年二月に丸亀藩に帰藩して士官し、同年十一月に丸亀藩が西京へ出兵するとそこに同行している。翌年三月に帰藩し八月に大阪の桃井春藏に入門した。そして、明治三年五月から伊勢、尾張、美濃へ剣術修行のため赴き、「剣道試合人名帳」によれば、十月に岩村藩を訪れている。

猛雄の剣術士としての側面は、『下田歌子先生傳』に「やや小軀ながら大膽、慧敏、常に二尺八寸あまりの無外^{むざり}の大刀^{だいとう}を横たへてゐたところから、當時の剣士たちはみな「無外の猛雄」と呼んで、その勁烈な刀法に怖れをなしてゐた」とある。また同書で、陸軍中将、陸軍大臣等を務めた岩村出身の軍人である大島健一が、岩村での剣術試合の様子を伝えている。岩村藩の指南役であった穴戸とは双方譲らず勝負がつかなかったが、それ以外「藩中の武士で一人も、下田氏に勝てる者は居らなかった」という。¹⁰⁾

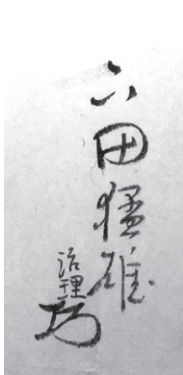


図9
「剣法規則條目伝」
(640) (部分)

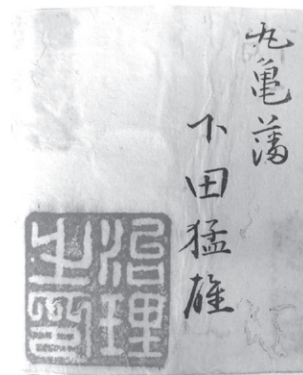


図8 同右

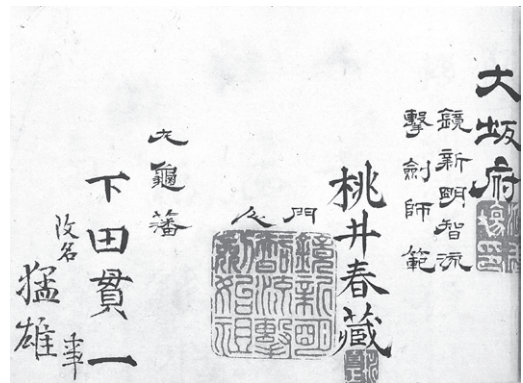


図7 「剣道試合人名帳」(部分)

2. 猛雄と平尾家との接点

これまで猛雄と平尾家の接点については、慶応二、三年とする説と明治三年以降とするものが見られる。

平尾家との接点を、慶応二、三年頃とする記載は『下田歌子傳』¹¹、『下田歌子先生傳』に見られる。いずれも前出の大島健一の回想文に依っている。

(前略) 元治、慶應の頃、門弟十餘名を率ゐて、武者修行に出掛け、慶應二年頃、東濃、岩村に來つて、藩の文武所を訪ひ試合を申込みれた(中略) 猛雄は優にやさしき心掛けがあつて、和歌の道を平尾家に就いて學んだ、女史の祖母、貞は快くうへないで指導された、約半ヶ年の後、一行は又修行の途に上つて訣別した。(後略)

『下田歌子傳』

(前略) 女史の夫君の猛雄さんといふ方もよく存じて居る。たしか四國の武士で、あれは確か慶應三年の春頃と記憶するが、岩村に武者修行と稱して、下田氏を頭とし一行十二、三人の擊劍家が堂々と乗り込んできた。(中略) 穴戸先生の申し出により、暫く藩に留まつて弟子達を教へてゐるうち、學問の方は劍術に伴はなかつたのか、藩士に劍道を教へる傍ら、自分から進んで、女史のお父さんからその方面の教へを受け

てゐたらしい。(後略)

『下田歌子先生傳』

『岩村町史』¹²によれば、大島健一は「明治初年岩村を離れ」ているとあり、安政五年生まれの大島が、猛雄一行の試合を見たのが慶応三年春とすれば、猛雄は十八歳、大島は九歳の頃ということになる。歌子は十二歳の頃である。しかし、万延二年から明治四年の試合が記録された「剣道試合人名帳」の慶応年間に岩村での試合は見いだせない。

一方、明治三年以降とする説は、おそらく前出の剣道試合帳を踏まえて、山口が「下田歌子の結婚前後」¹³において、「彼と平尾家とのめぐり会いはここ(明治三年…筆者注)から始まつたものと見られる」としていたが、その後「下田歌子の青春」¹⁴においては、「平尾録蔵はその年八月既に宣教使史生として東京へ出ているから、このとき猛雄との出会いはなかったと思われる。せき子は当時十七歳、¹⁵武者修業のこの若い劍客と出会つたかどうか、これも不明である」としている。録蔵の宣教掛仰付の文書は明治三年六月付となっており、本人の諸届の控えにも同年八月出京とある。同年十月十八日出頭の仰付書が前日に出されているところを見ると、確かにこの時録蔵は東京にいたようである。これらの資料からは、猛雄と平尾家の明確な接点は見えてこない。

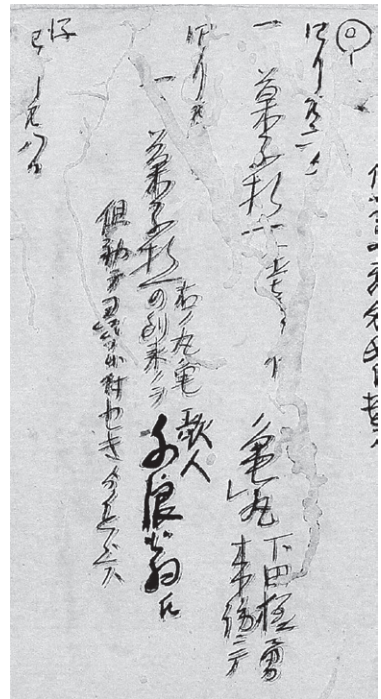


図10 「大宝恵」(部分)

猛雄と平尾家の接点について、明治三年までについては不明だが、翌四年四月に猛雄と録蔵の接点が見える。録蔵が贈答などを記録した「大宝恵」(二四七二)の明治三年八月から七年、九年六月を綴った一冊の中の同四年四月廿六日の記録である(図10)。

この日、猛雄が録蔵を訪問している。「下田猛勇」と書かれているが、内容から猛雄と考えられる。この記録以前には猛雄の名がないことと、「亀丸」と書かれていることから、おそらく猛雄の最初の訪問ではないかと推測される。猛雄の履歴には、六月から東京寄留とあるが、それに先立ちすでに上京していたことになる。

訪問の際に猛雄は菓子折を持参した。その菓子折を録蔵は翌二十七日に、歌人千浪翁を初めてせきが訪問する際に持たせている。¹⁶「せき」が鉦(歌子)であることは疑いない。千浪翁(加藤千浪)は鉦の歌の師の一人である。

鉦は同年四月八日に岩村を出立し東京へ向かった。その道中を記したものが紀行文「東路の日記」である。日記は四月二十日に三島を発ち、箱根山を越えるところで終わっている。東京に到着したのはその二、三日後くらいであろう。前出の加藤千浪への訪問以降の記述に「せき^江」「せき^{より}」と書かれるようになることから、鉦も猛雄の訪問とほぼ同時期に録蔵のもとに到着したと考えられる。

この四月の訪問について山口は、「明治四年四月に、下田猛雄は丸亀から出てきて東京の平尾家を訪ねる。下谷の警察署で録蔵は漢字を講じ、猛雄は剣道を指南していた、そういうめぐり合わせが、歌子と猛雄を結びつけたのだと思われる」と述べている。¹⁷

踏み込んだ憶測は避けたいが、丸亀から出てきた猛雄は、この時録蔵を訪問する理由があつたはずである。録蔵の警察署(屯所)での教授が確認できるのはもう少し後のことであり、これが猛雄と録蔵との再会だったのか、訪問の理由は明らかではないが、四月の訪問がその後の録蔵との親しい関係を持つ接点であり、猛雄と歌子との結婚へもつながっていったことは確かであろう。

下谷の警察署での猛雄との交流がどのようなものだったのかも明らかでない。

録蔵は、猛雄来訪後の五月十一日に、「御陵権助 八木氏」という人物に玉子箱入を送っている。その但し書きには「下田氏調べ被具候也」という文字が見える。猛雄が訪ねてきた直後に、ど

のような人物かを調べているということは注目に値する。

その後猛雄は幾度か平尾家を訪ね、翌五年二月三日に仙台へ発つ暇乞いに来ている。録蔵はこの時猛雄に脇差を一本饒別に贈っている。銘も同じ年の十月に女官として宮中に召された。

猛雄の動向は、「手扣」によれば、明治八年十二月に永田町二丁目拾四番地の平尾録蔵方へ送籍されているが、明治四年六月から同八年十二月までの住所は不明な点も多い。

山口は録蔵、猛雄、歌子の書簡、録蔵の日記によって、「かなりの期間仙台に在住した様子」であるとしている。¹⁸材木を扱う仕事に関わっていたようである。

銘の宮中出仕後は録蔵が間に入り、細心の注意を払いつつ、二人の手紙のやり取りの仲立ちをした様子がうかがえる。その間の書簡は山口によって翻刻されている。¹⁹

歌子は宮中で、気苦労が絶えず、「まことや、烟の中にたつとも人には立難しと、ましてやいろ／＼さわり出きて、人の心のぐちなるまゝにつらき事のみあまたなるに、まぢかきほどに君をおきてかくわかれ参らすること、いかばかりにか待らん。まぐらのちりをはらひあへず、あひ見てののちの心にくらぶれば、むかしはものを思はずと、昔のあとのたどられて、夜となく日となく思ひしづみつゝ、我ながらも、あやしや、かくまでに思ひしづみし事も是までハなかりしに、心に似ぬはなさけの心にて候」と、猛雄への想いを包み隠すことなく書き綴っている。猛雄からの手紙を読むにも神経を使い、「くりかえし拝し上候へ共、人の見る

目のいぶせさに、をしくもさき捨て」なければならなかった。

猛雄から歌子への書簡にも、「暑寒になるにつけても、御まゑのからだ病身故、外の事うちわすれ、ただ／＼おまゑの事のみおもゐくらし、もはや当年も三月となり、来春は早速よろしくともあしく共、鳥渡なり帰国致候て、御目に掛り、相談も御座候間、それをたのしみ御待ち被下度」と歌子を思う気持ち、会いたい気持ち、率直に伝える。また、急用で東京へ行く仕事関係の知人に「おまゑのしやしん是非々々此者迄御届ケ被下度」と写真をせがんだりもしている。

そのほかの書簡のやり取りからも、猛雄との結婚は父の意向によるもので、歌子はそれに従わざるを得なかったとする『下田歌子先生傳』等の記述には疑問を感じる。おそらく想定外の歌子の宮中出仕によって、二人は結婚を待たざるを得なくなってしまうものではなからうか。

猛雄は生計のためか、慣れない仕事に取り組むが、順調にはいかなかったようである。明治六年九月には仙台からの材木が大雨によって流出し、多大な損害も出している。一方の歌子は平尾家にとつての光明となつて宮中に出仕し、その才能と努力によって、異例の出世することとなつたが、多大な心労を抱えて体調も崩している。猛雄が生計を立てられるようになり、宮中を辞して妻となることを切に望んでいた様子が書簡から伝わる。

録蔵は、明治六年一月に猛雄が丸亀に赴く際の饒別に、短刀を一本贈っている。まだこの頃は、猛雄のことを録蔵は「下田氏」

と敬称をつけて記している。同八年になると、敬称は消え「下田」と変化していく。同年六月一日の届出により、平尾家が本所相生町に移転する際、猛雄も同所に寄留したようだ。同月二十二日に猛雄の師である島村勇雄から卵が、同月二十四日には叔父の浜村三上から鯉節が届く。同月三十日に猛雄は「カウステ井う一箱」を持って祖父のいる東條家を初めて訪れている。その後、猛雄は高崎正風邸方に寄留替えした平尾家でも同居していた。

猛雄は同居以降、明治十一年四月に平尾家が永田町の高崎正風邸から麻布の飯倉片町の借家へ引越すまでの間、平尾家を拠点として何度か寄留先を変えている。

飯倉片町の住居は三十年の借地契約で、借主は録蔵、保証人は猛雄である。明治十二年二月にこの場所で、猛雄を校主とし、録蔵も教師を務める私立学校「鍊養学舎」を開校するが、すぐに立ち行かなくなり同年八月には廃校してしまう。このように、おそらく結婚に向けての事業だったかもしれないが、うまくいかず、資金繰りも厳しかったに相違ない。猛雄の「手扣」には、借佣金の証書の写しも記載されている。明治十二年一月に猛雄が借主で三十円、同年六月に録蔵と猛雄連名の借主で八百八十円、同年十二月に六百三十円と借金を重ねていたことがわかる。明治十三年十一月に歌子の入籍願の写しがあるが、この記載の次には、猛雄と歌子の連名で二百四十円の借用証書が写されている。結婚後も借金を重ねており、金銭面での苦勞がうかがえる。²⁰

歌子の書簡は「共におひての其のちも、むかしの書をミて、諸

共にさま／＼の御事をかたりもしき／＼もせバ、いかばかりかたのしからん」と、夫婦の老後にまで思いを馳せる。その後の結婚生活が猛雄の病気によつて、つらく厳しいものとなることを、この時点ではまだ想像もできなかったであろう。

3. 結婚と死別

歌子の明治十二年と思われる書簡では、宮中を辞すための方策を録蔵及び平尾家家族一同に書き送っている。²¹

下田歌子差出書簡 平尾家族宛 五月三十一日(二九三)

(前略) 誠に／＼のミの目ほどすぐれ不申、ふ快といふ程の事ハなけれど、兎角のしたじに大きくいひて部屋江行べし、部屋取込ミゆゑ、やどへ下れといはれたらばすぐ下り、少し日数を重ねて、兎角ぶら／＼とすぐれ不申とて、もし御役に立不申候間、恐ながら免しよく願ふといはゞ、一番の手だてならんと思ハるゝ也(後略)

一度宮中に上がった者は、一生奉仕するものという旧習の中で辞するには、体調を崩して職を全うできないという理由が穏当であると、歌子は辞職への段取りを整えていったようだ。書簡から、六月初め頃には宿下がりをしたのであろう。宮内庁宮内公文書館に残る歌子の辞職願は十一月十七日付である(図11・12・13)。

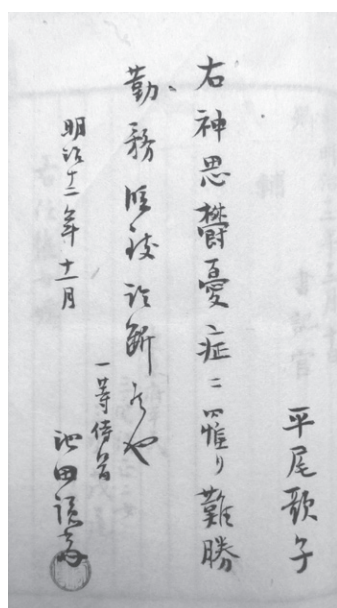


図13 同右

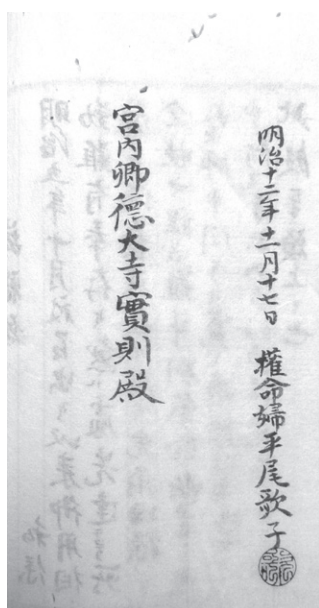


図12 同右

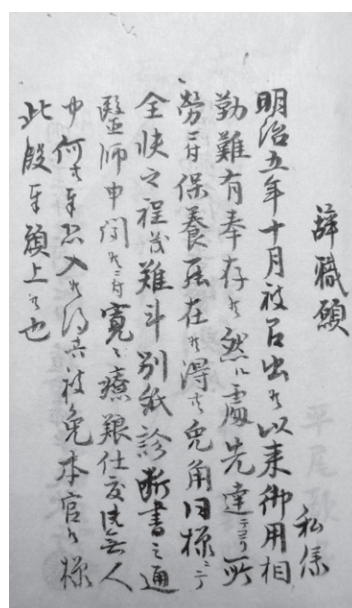


図11 「進退録 女官ノ部
自明治十一年至明治十五年」
明治十二年第五號 権命婦平尾歌子
依願免官ノ件(十一月)(部分)
(宮内庁宮内公文書館所蔵)

やつとの思いで宮中を辞したという感がある。²²

二人はいつ結婚したのかという点も、これまでいくつかの説があるが、なにをもつて結婚したとするかによって見解が異なるところであろう。猛雄の「手扣」にある入籍届の日付は明治十三年十一月となつている。

歌子は辞職後も体調がすぐれず、明治十三年七月には女官の柳原愛子と植松務子に誘われて伊香保へ療養の旅に出ている。香雪叢書第一巻所収「伊香保の記」はその記録である。²³

結婚後の明治十四年七月に二人は京橋区日吉町に移転し、その後明治十五年一月に麹町区一番町へと移る。平尾家も麻布区六本木に移転した。

猛雄の病気がいつ頃から発症したのか。山口は宮中にいた歌子から猛雄に宛てた書簡に「御灸事おこたり給ふなよ」と繰り返し書かれていることから「この頃既に病患を抱えていたものらしく」「伝うるところによれば病気は烈しい胃病であつたというから胃潰瘍か胃痛にでもなつていたのであろうか」と述べている。²⁴しかし、はつきりとしたことはわかっていない。

歌子は麹町一番町への移転後の、明治十五年三月に私立女学校開業上申書を提出し、下田学校を開校する。同六月に校名を桃天学校と改め、着実に女子教育の一步を踏み出した。

学校設立の経緯は、宮中で評判であつた歌子の才能が家庭に埋もれることを惜しみ、自分たちの妻子の教育を任せたいと願う、政府高官らの囑望と援助によつて実現したとされる。そこには病

身の夫、経済的な不安を抱える平尾家を背負わなくてはならない事情もあった。

すでに桃天学校設立以前から、私塾として教えていたようで、その当時の教え子である本野久子の明治十二、三年頃とする追憶談を『下田歌子先生傳』が伝える。

（前略）先生の御主人は、多分胃癌であつたらうと思ひますが、もう随分前からお床に就いて居られるとの事で、私たちも時々そのお住居の方から、大きなお聲で、先生のお名をお



図14 記念碑(丸亀城内)

呼びになるのを聞きました。なかなか御病人の氣質がむづかしく、たいがい辛抱強い看護婦さんでも、一週間とは續くものがない、などといふ話も聞いてみました。

最も厄介なのが御病人のお食事でありまして、一切の召上り物を、みな先生が手づから御料理なすつていらつしやる、といふ話も聞きました。先生の御介抱は全く何も彼も行届いたもので、私たち若い娘共は、まづそのお我慢のお強いのに、ただただ吃驚するばかりでした。

当時敷地内の小山のように盛りあがつた向こうに家族の住まいがあり、下に校舎があつたとのことである。猛雄は、妻となつた歌子が自らは成し得なかつた私立学校経営を着実に進め、上流階級の子女の入学者が増加していく状況に、劣等感、挫折感をいだいていたかもしれない。大声で怒鳴るような粗暴な姿が伝わるのは、そのようなやり場のない怒りのあらわれであろうか。

明治十五年京極朗徹が東京で死去した。朗徹の死を哀惜追悼して、加藤修造ら二十一人の主唱者の呼びかけで建立費用を募り、旧藩士など百五十四人の賛同を得て明治十六年四月、丸亀の浜町にあつた船魂（玉）神社境内に記念碑が建立された。この石碑は船魂神社が移転した際に丸亀城内に移されたが、石碑の脇に、賛同者の名前を刻んだ「捐金人名記」石柱がある。この度、丸亀市立資料館の林恵氏より、半分以上土に埋もれた状態となっている



図17 記念碑「捐金人名記」
石柱 裏面 部分



図16 記念碑「捐金人名記」
石柱 裏面



図15 記念碑「捐金人名記」
石柱

石柱の裏面上二段目に下田猛雄の名が刻まれていることをご教示
いただいた。²⁵(図14・15・16・17)石碑建立当時猛雄はすでに病床
に臥しており、丸亀に赴き、この記念碑を見ることは叶わなかつ
たであろう。猛雄が旧藩主への思いを込めてその名を刻み、朗徹
の墓がある、現在の東京都港区南麻布にある光林寺を自らの墓所
としたことは、時代が明治に変わっていく中でも、武士としての
忠義を持ち続けた猛雄の武骨な生きざまを物語るようである。

猛雄は明治十七年五月二十三日に闘病の末死去した。歌子の当
時の心境を詠んだ歌が残っている。²⁶

病む人のみとりにかき籠りける年の春

目に近く見るとはすれど咲く花の色はこゝろに移らざりけり

いみじきいたづきに悩む人のみとりに打ちわびつ

つありける年の暮に

うつばりの煤もはらはでくれ竹の臥戸ながらにおくる年かな

いかなるをりにか

人知れぬ涙にのみもくれなるのいとも怪しき縁にこそあれ

いみじきいたつきに臥して四年餘りを経て遂にえ
立たずなりし夫が喪にこもりける頃税所敦子刀自
がもとより 昔見し夢の浮橋思ひきや君が上にも
かゝるべしとは といひおこせられける返事のは
しに

君が見し夢の浮橋わがうへにかゝらんものと思ひかけきや

はふり果てゝ家に還り入る頓て人心無くなりて

又の日ふと我に返りたれば山縣夫人田中夫人のわ
が傍らに添ひ臥し在して嬉し蘇り給へるよとて搔
き抱き給ひける程心の中に思ひつゞけたる

友垣のたすけし無くば臥柴の臥しながらにも朽ちぞしなまし

來しかたはみな夢とのみおもほえて今の現はうつゝともなし

歌子は夫を弔つた後、氣を失つてしまうほどの心労から醒め
て、現実とは思えない、まるですべて夢だったように思える
と詠った。夢という一文字に、病身の夫の看病と死別、新たな学
校経営といった、猛雄と出会った当初には想像もつかなかったで
あろう現実を見る思いがする。

おわりに

下田猛雄の戒名は今回の位牌の発見により、「天倫院亨外全理
居士」であることが確認できた。「下田家過去帳」にある猛雄の戒
名とも一致する。また、光林寺のご住職菅原義明氏より、同寺の
過去帳の明治十七年五月二十三日に猛雄の戒名と「一番町 下田
猛雄」の記録があることをお教えいただいた。

その後、隆崇院のご住職桂啓輔氏のご教示により、平尾家先祖
代々の位牌二柱、父録蔵、母房、弟銚蔵及び、歌子の別の位牌各
一柱を確認した。

猛雄の位牌は発見当初、歌子の位牌に比べて極端に小さいとい
う印象であつたが、平尾家代々の位牌一柱、録蔵の位牌と比べる
とほぼ同じ大きさであつた。しかも、形式はほかが札型位牌であ
るのに対して猛雄のものは牌身に袖の付いた雲形位牌である。こ
の形式は通常位の高い人物の際に用いられるとのことと、住職の
位牌もこの形式を用いる場合があるとお話だった。歌子の位牌
は、現在確認できる二柱とも猛雄の位牌よりは大きい、歌子自
身が、夫の位牌と不釣り合いになるほどの大きな位牌をなど望ん
でいたとも思えない。猛雄亡き後歩んだ女子教育者としての道の
りが、結果として位牌の大きさに顕れたということになる。

山口は、録蔵、猛雄、歌子の間での書簡やそれを裏付ける録蔵
の資料からうかがわれるのは「下田先生の秘められた青春などと

というような好奇的な内容ではなくて、この三人がそれぞれの立場で祈った、小さなつつましい幸せへの願いと努力」であつたと述べる。しかし、その願いと努力は潰えて、猛雄は四年あまりの結婚生活の終わりを、「酒乱という汚名まで残して、おのれをも歌子をもずたずたに引き裂くようにしてその生涯を終えたのである」と評している。

猛雄とはどんな人物であつたか、今回の検証でもその人物像が明らかになつたとは言い難い。しかし、装飾の施された猛雄の位牌は、二人の若き日の想いもその後の思わぬ困難も含めて、共に悩み苦しんだ歳月を経て、一人亡くなつた夫への歌子の愛惜の情を物語るものではなかつたかと改めて感じている。

猛雄の喪が明けた直後の明治十七年七月十日に、歌子は宮内省御用掛を任せられ、華族女学校設立準備から教授、学監と新たな女子教育の道へ踏み出すこととなつた。その後の歌子の人生に、猛雄との年月がどのような影響を残していったかなど、更なる検証が必要な点は多々あるが、それらは今後の課題としていきたい。

附 下田猛雄位牌調査報告

調査月日…平成三十年八月十九日(日)、同年十二月二十三日(日)

調査地…隆崇院(岐阜県恵那市岩村町)

調査経緯…

平成二十六年より継続中の実践女子大学図書館蔵下田歌子関

係資料中の自筆日記(出納番号三十〇三十三)の調査過程において、猛雄の戒名の一部分のみ記載があり、記載事項の検証のため、位牌が保管されている可能性の高い隆崇院に位牌を探していただくようお願いした。

隆崇院では、先代住職桂芳彦氏が晋住された平成十二年時点において、猛雄の位牌の存在は確認されていなかった。先々代住職からも引き継ぎはなかつたとのことで、位牌の経緯については詳細が明らかでない。

八月の調査において猛雄の位牌を確認し、十二月の調査において平尾家先祖代々の位牌二柱、父録蔵、母房、弟錦蔵及び、歌子のすでに確認されている以外の位牌各一柱が確認できた。これにより猛雄の位牌との形状、大きさ等の比較を行った。

なお、猛雄以外の位牌に関する調査報告は別稿を予定している。

下田猛雄位牌²⁷

形状 雲形位牌 頭部雲形の中央上部に円相 牌身の左右に袖あり

台座…蓮華須弥壇座形式

全長…十五・〇cm 幅(袖を含む)…六・〇cm

牌身長(頭部を除く)…六・五cm 幅…三・三cm

表面 黒漆塗の上から金箔か 戒名を陰刻

天倫院亨外全理居士

裏面 黒漆塗(陰刻して刻字の上から朱塗りか)

明治十七年五月廿三日卒

下田猛雄
行年三十七才



裏面



表面

今回の調査にあたって、隆崇院前住職桂芳彦氏、現住職桂啓輔氏、光林寺住職菅原義明氏、丸亀市立中央図書館館長徳田明香氏、同次長村上昇氏、丸亀市立資料館館長佐喜晶子氏、林恵氏に格別のご高配とご教示を賜った。また、丸亀市立中央図書館、丸亀市立資料館、宮内庁宮内公文書館に資料閲覧等でご協力をいただいた。心より感謝申し上げる。

- 注 1 実践女子大学図書館「下田歌子関係資料 出納番号三六六八、以下括弧内の数字は出納番号とする」
2 「丸亀藩分限帳」『新編丸亀市史4 史料編』丸亀市史編さん委員会編 丸亀市 一九九四年
3 「丸亀藩俸禄帳」『新修丸亀市史』（復刻版）新修丸亀市史編集委員会編 丸亀市役所 一九七九年には「下田質蔵」とあるが、丸亀市立中央図書館所蔵の書写本のコピー版（原本天保十三年）で「賢蔵」と確認できる。
4 「天保十五年 給禄帳（切米合力）」丸亀市立資料館所蔵
5 『丸亀市史』丸亀市史刊行頒布会編 一九五三年及び注3 『新修丸亀市史』
6 「諸藝上覧一件帳」丸亀市立中央図書館所蔵、『新編丸亀市史4 史料編』に翻刻あり。
7 「丸亀藩分限帳」享保十二丁未年（安政六年写）丸亀市立中央図書館所蔵
8 山口典子「下田歌子の青春——その光と翳」『りんどう 第四号』実践国文科会 一九七九年
9 松原正勝編著『無反りの猛雄』恵那秋水会 二〇一七年

10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

『下田歌子先生傳』故下田校長先生傳記編纂所 一九四三年

猛雄の「手扣」には本人の衣の寸法として「丈 六寸五分 ゆき 八寸 後 八寸 前 六寸五分 そで 四寸」の記載がある。

西尾豊作『下田歌子傳』咬葉塾 一九三六年

『岩村町史』岩村町史刊行委員会編 岐阜県岩村町役場 一九六一年
山口典子「下田歌子の結婚前後——父・夫・歌子の書簡をめぐって——」『実践女子大学文学部紀要11』実践女子大学編 一九六八年

注8に同じ

歌子は出生時、^{すま}銘と名付けられたが、宮中出仕中の明治五年に「うた」(明治四十四年に歌子と改名)の名を賜った。山口氏は「せき子」としている。十七歳は数え年である。

虫損で判読できないが、次の項が二十八日とあり、山口は「平尾せき子とその周辺——下田歌子研究——」「りんどろ 第三号」実践国文科会 一九七八年の中で、二十七日としている。

注8に同じ

注13に同じ

注13に同じ

猛雄、録蔵、歌子の借入金については、山口典子「下田家墓所覚え書——宝津寺・光林寺・隆崇院・護国寺——」「実践文学」第三十五号 一九六八年に詳しい報告がある。

翻刻は注13より抜粋

診断書を書いた池田謙齋は宮内顧問官も務め、当時は「等侍医」と記されているが、後に初代東京大学医学部宗理となつた医学博士である。歌子が宮中を辞して華族女学校学監となつてからも、診察を依頼するなど、交流があつたことが下田歌子の自筆日記からうかがえる。

栗原元吉編『香雪叢書 第一巻』実践女学校出版部 一九三二年

注13に同じ

記念碑の「捐金人名記」石柱に刻まれた人名については、丸亀の郷

27 26

土史家、故堀家守彦氏による調査、翻刻資料を丸亀市立資料館が所蔵されており、この資料についてもご提供いただいた。猛雄は「金式円」を寄付していたことがわかる。

栗原元吉編『香雪叢書 第二巻』実践女学校出版部 一九三二年
位牌の形状等については『日本仏教民俗基礎資料集 第四巻 元興寺極楽坊 IV』中央公論美術出版 一九七七年を参照した。

(あいこつ・はるみ／実践女子大学 下田歌子記念女性総合研究所 第1部門客員研究員)

Findings about Takeo Shimoda
— Supplementary Report: Investigation on the mortuary tablet of Takeo Shimoda —

AIKO Harumi

Takeo Shimoda, what kind of person was he?

The mortuary tablet of Takeo Shimoda, which had been missing for a long time, has been found. This report investigates Takeo Shimoda, the husband of Utako Shimoda, with reference to the previous studies.

Takeo Shimoda was a clansman of Marugame Domain in Shikoku; he was a swordsman.

He traveled to various places in Japan for training in swordsmanship and stopped by Iwamura Domain, which is Utako's hometown.

It has been said that In early Meiji era, he coached swordsmanship in Tokyo; he instructed swordsmanship in the police academy where Juzo Hirao, the father of Utako, taught.

Takeo soon had close a relationship with Juzo, and this relationship is said to have resulted in his marriage to Utako.

Utako resigned as a court lady and married Takeo, but he suffered a serious illness.

She had strong requests from people around her, and started a private school for women's education; she established the school on her premises. At the same time, she nursed her husband, but he died of illness about four years after they married.

After that, Utako became remarkably active as a women's educator. Takeo, however, has been considered as a person who was behind the times, and who was a burden on Utako.

This study takes a fresh look at Takeo based on related materials.

It also shows images of Takeo's mortuary tablet, from which we can sense Utako's strong feelings for her husband.